談話における視点ー視点の移動とゼロ代名詞照応ー

高中英貴
慶應義塾大学大学院
hid@sfc.keio.ac.jp

1 はじめに

日本語談話ではしばしば主語・目的語などが省略され、それらはゼロ代名詞と呼ばれている。既にゼロ代名詞照応の解決については多くの議論がなされている[1,2,3,4]が、本稿では特に、解釈者の視点がいかに代名詞照応に寄与するかについての考察を行う。とりわけセンタリング理論を考慮した上で、談話中に言及される要素の顕現性より、解釈者の視点の特定を、照応解決では優先すべきであると考える。このような観点から、談話における視点の形成過程について、アンケートの結果に基づきながら、いくつかの表層表現に着目した考察を行う。

2 代名詞照応と顕現性の問題

日本語のゼロ代名詞照応を扱った研究のひとつにセンタリング理論[1,2]がある。この研究は、発話内の格要素のうち、談話中のその時点で最も顕現性（salience）が高い要素（その発話時点で当該談話が何についてのものであるか（what the discourse is about）を示す）を談話のセンターであるとし、ゼロ代名詞の照応先の有力候補に位置づける。センターを決定するためには、あらかじめその候補を（＊1）の基準（文法要素に基づく顕現性の序列）に従ってランク付けした上で、次の発話にその格要素が言及されるか照応されるかを確認することが必要となる。つまりその判断は事後的になされる。また、一度定まったセンターが継続される（continue）談話の方が、結束性が高く、解釈の上でより好まれるため、曖昧な照応候補に優先順位が与えられることになる。

（＊1）は格・ゼロ代名詞＞共感表現＞が格＞に格＞を格＞他

ここで2つの問題点を指摘したい。まずひとつは顕現性という基準がゼロ代名詞照応を説明・予測する上でどこまで有効であるかという点である。（1）の序列において顕現性の低い格要素でも、代名詞化が可能であることをふまえると、どのような契機で序列の低い格要素が照応されるのかを説明する必要が生じる。本稿では視点という基準によってその説明を試みる。

（1）を見ると、センタリング理論においても、共感表現に着目することで照応における視点の寄与を考慮していることが分かる。しかし、それが文法格というレベルの異なるものと同一に序列されているため、顕現性との区別が曖昧になっている。本稿は、両者を区別することにより、照応における視点独自の寄与を考察する。

もうひとつの問題は、センターの継続・移動は、結束性の高い談話への好ましさからでは充分に予測できるとはいえず、あくまで事後的に判断される点である。しかし、ある発話時点での視点を表層表現から特定すれば、事後的に判断される顕現性とは別に、その時点において照応先の絞り込みが可能となる。

以上の観点から、次に、視点に寄与すると考えられるいくつかの表層表現について考察する。

3 表層表現と視点抽出

本稿で扱うのは、「は・が格」「感情述語（＋モダリティ）」「授与表現」「動詞の意味特徴」「アスペクト」の、視点に寄与すると考えられる5つの表層表現である。また、対象となる談話は、（1）～（4）のような形式の、連続する2文からなるものであり、人物を格要素に持つ第1文と、ゼロ主語と感情述語からなる第2文から構成される。ゼロ主語の照応先の候補には、第1文の格要素として言及される人物の他に、その談話の発話者も含まれる。こうした形式の談話は、「物語文」や「描写文」に当たり、談話のタイプとしては限られたもとなるが、本稿の目的は照応現象における視点の役割を明確にすることであるので、上記のように照応の候補が人物のみで構成される談話を対象とした。

感情述語の主体（＝ゼロ主語）は本来その感情の直接の主に制限されるが、このタイプの「物語・描写文」では、視点の移動が可能となるため[5]、「発話者」自身か「読み手が共感視している人物」のいずれかとなる。従って「発話書」が置く視点を第1・2文の表層表現から定めれば、その視点をゼロ主語の照応先として特定できる。

以下に5つの表層表現と視点との関係を述べる。

・「は・が」格

（1）太郎が結婚した。
　　嬉しかった。

（2）太郎は結婚した。
　　嬉しかった。

（1）と（2）では、第2文の感情の主体（＝ゼロ代名詞）に対する解釈に違いが生じると考えられる。両

者ともに、その解釈は「発話者」と「太郎」の双方が可能であるが、本稿では（1）は「発話者」の解釈が（2）は「太郎」の解釈がより好まれると予測する。これは[6]でステージング効果とされるものであり、「は格」が使用される（2）では、それがマークする主体に読み手が共感視するため、視点が「太郎」に置かれる。また、「が格」が使用される（1）では、それがマークする主体が客観的な立場から描写されるため、視点が「発話者」に置かれることになる。つまり、「は格」は「が格」に比べて、（とりわけ物語文などで人物をマークする場合において）読み手に共感性を喚起する効果があるということである。センタリング理論では顕現性の序列に加えられていた「は・が格」を、この立場では視点に寄与するものとして扱えるため、授与表現などの他の共感表現と同列に扱い、それらの関係を考察することが可能となる。

・感情述語（＋モダリティ）

（3）太郎は／が結婚した。
　　嬉しそうだった。

（4）太郎は／が花子と結婚した。
　　嬉しそうだった。

「嬉しい」「悲しい」などの感情述語がある場合、（1）（2）で見たように、その感情の主体は「発話者」か、「発話者が共感可能な人物」でなければならない。だが、「～そうだった」というモダリティ要素が加わると、感情の主体は、逆に発話者の立場から客観的に観察される人物となる。従って（3）では、感情の主体は「発話者」ではなく、太郎に特定される。一方（4）ではその解釈が「太郎」「花子」ともに可能になるが、この場合は「は・が格」の違いによってその解釈が異なる可能性がある。このように「感情述語＋モダリティ」「は・が格」といった表層表現が、どのように協働して視点の決定に寄与するのかを考察することにより、第２文のゼロ代名詞（感情主体）の特定につなげるのが本稿の目的となる。

・授与表現

「やる・くれる」などの授与表現（「～てやる・～てくれる」などの補助動詞を含む）は、読み手に共感性を喚起する表現として知られ、前者ではその動作主側に、後者では動作の受益者側に視点が置かれるとされる[7]。本稿では、「動作主」「受益者」に加え「発話者」も視点の位置として考慮に入れ、第１文におけるこの表現の有無が、視点の決定にどのように関わるかを考察する。

・動詞の意味特徴

「～を見る」のような動作は、授与表現同様に、動作主とその対象の間に動作の方向性があるため、それ自身で視点や共感性を喚起することが考えられる。

・アスペクト

「～ていた」（「見ていた」「話していた」）といったアスペクト要素は、表現される事態において、「結果」よりその「過程」を中心に描写するものと考えられる。第１文で「～ていた」による「過程」描写がある場合に、第２文の感情の主体が、第１文の行為の発動者（動作主：「過程」に関与）になるか、その受け手（被動作主：「結果」に関与）になるかを、語幹の動詞の意味特徴をふまえながら考察する。

4　方法

３で示した２文からなる談話形式をとり、５つの表層表現を変数とする２８組の談話をランダムに並べたアンケート（＊２）を配布し、第２文のゼロ主語を選択させた。（被験者は大学生３１名）

（＊２）

○以下の文について、第２文の主語を次の４つから選んで（　　）内に記入してください。

1　太郎　2　花子・次郎　3　話者

4　1～3以外の人物

（例）太郎が笑った。

（太郎は）楽しそうだった。

と考えられる場合は、１を選んでください。

また第１文が不適格（不自然）と思われる場合は、５を記入してください。

・太郎は花子と結婚した。

嬉しかった。　　（　）

・太郎が花子を見た。

楽しそうだった。　　（　）

5　結果と考察

結果は表１のようになった[1]。以下に考察を、設定した５つの変数（「は・が格」「感情述語＋モダリティ」「授与表現」「動詞の意味特徴」「アスペクト」）の効果に着目して述べていく。

・「感情述語＋モダリティ（そうだ）」

表１からも分かるように、第２文で「感情述語＋そうだ」が含まれる場合、感情主体として「発話者」が解釈されることはない。従って、「発話者」から視点を移動させる効果を持つ表層表現であり、その優先順位は高いといえる。

---

[1] ４と５の回答はいずれの場合も非常に少なかったため、便宜上１～３までの回答の結果を表にした。また回答には空欄などもあったため、表の合計数は必ずしも一致していない。

・「は・が格」

	太郎	花子	発話者
(5) 太郎は花子と結婚した。			
嬉しかった。	21	0	10
(6) 太郎が花子と結婚した。			
嬉しかった。	9	2	19

(5)(6)を比較すると、前者では太郎に、後者では発話者に視点がある解釈が好まれることが分かる。これは3で述べたステージング効果と一致するものであり、(5)では、「は格」にマークされる要素(太郎)に視点が移動している。一方「が格」が使用された(6)では、第1文は発話者の視点から事態を客観的に描写していると解釈されたと考えられる。ここで仮にデフォルトの視点が発話者にあるとすれば、以下のような視点の移動が生じているといえる。

(5)「は格」: 視点「発話者」→「太郎」(は格)

(6)「が格」: 視点「発話者」(保存)

しかし、次でも見るように、「授与表現」と共起する場合では、「は・が格」の違いによって結果に差が生じていないため、「は・が格」による視点移動の効果は「授与表現」が視点にもたらす影響を下回るといえる。

・「授与表現」

	太郎	花子	発話者
(7) 太郎は花子と結婚してくれた。			
嬉しかった。	2	7	19
(8) 太郎が花子と結婚してくれた。			
嬉しかった。	1	3	26
(9) 太郎は花子と結婚してあげた。			
嬉しかった。	1	9	16
(10) 太郎が花子と結婚してあげた。			
嬉しかった。	2	9	17

3でも述べたように授与表現を含む文では、「くれた」の場合には動作の受益者に、「あげた」の場合には動作主に視点が置かれるとされる。従って(7)(8)の視点は、第1文の時点で「花子」(直接の受益者)「発話者」(間接の受益者)のいずれかと想定され、結果では「発話者」の解釈が好まれている。これは、第2文に感情述語があるため、主観的な感情表現の使用がもともと可能となっている「発話者」の方が、第1文で明示的に言及されている(つまり客観的描写対象となっている)「花子」よりも、視点の位置として好まれやすいからだと考えられる。一方、(9)(10)の視点は第1文では「太郎」(動作主)か「発話者」(デフォルト)だと想定されるが、結果では「発話者」と「花子」の解釈が「太郎」を上回っている。これは、第2文の感情述語(嬉しかった)がその主体を受益者に求めるからだといえる。つまり、感情述語にはそもそも受益に関わる語彙特性(「嬉しい」の場合受益性は+)が備わっているといえ、授与表現との間で意味的な整合性が保てるように解釈されると考えられる。従って本稿で扱った、感情述語を含む談話形式では、「授与表現」独自の視点への寄与を定めることは、他の表層表現に比べて困難だといえる。また感情述語に「〜そうだった」が接続される場合でも同様に、全て受益者に視点が置かれる解釈(「花子」)が好まれている。

・「動詞の意味特性」「アスペクト」

	太郎	花子	発話者
(11) 太郎は花子を見た。			
楽しそうだった。	6	25	0
(12) 太郎が花子を見た。			
楽しそうだった。	10	19	0
(13) 太郎は花子を見ていた。			
楽しそうだった。	10	19	0
(14) 太郎が花子を見ていた。			
楽しそうだった。	20	10	0

(11)〜(14)ではいずれも第2文の感情述語にモダリティ要素「そうだった」が接続されており、視点の解釈は「太郎」と「花子」に限られる。(11)と(12)ではともに「花子」の解釈が好まれている。これは「見た」という動詞が視線(この場合は「花子」が対象)を喚起する「意味特性」を有し、また、単純過去という動作の「結果」に焦点を置いた表現であるため、その視線の受け手である「花子」が第2文の主語として解釈されたといえる。この両者では「は・が格」の違いによる影響はあまり生じてないが、(13)(14)ではそれが視点解釈の明らかな違いとなって表れている。この場合の両者の特徴はアスペクト要素「〜ていた」が接続されていることであり、それによって動作の「過程」に焦点が置かれ、進行中の事態が描写されることになる。そのため、「発話者」の視点から「太郎」の様子が描写される(14)と、「太郎」の視点から「花子」の様子が描写される(13)の両者がともに可能となり、「は・が格」の共感性の違い((13)では「は格」により「太郎」に共感)が、視点解釈の違いとなって表れていると考えられる。

	太郎	花子	発話者
(15) 太郎は花子と話した。			
楽しそうだった。	5	25	0
(16) 太郎が花子と話した。			
楽しそうだった。	8	22	0
(17) 太郎は花子と話していた。			
楽しそうだった。	20	11	0
(18) 太郎が花子と話していた。			
楽しそうだった。	17	14	0

一方、動詞「話した」の場合、（１５）（１６）は「見た」と同様に結果に焦点が置かれた描写となり、動作の受け手である「花子」が第２文の主語として解釈されるが、アスペクト要素「～ていた」を含む（１７）（１８）では、「見ていた」の場合とは異なる結果となっている。この両者はそれぞれ（１５）（１６）と比べて、ともに「太郎」が第２文の主語として解釈されることが好まれており、「は・が格」の違いの影響は少ない。これは「話す」という動詞が「見る」とは異なり、動作主から受け手への視線を必ずしも要請するわけではないからだといえる。従って「は格」がもたらす共感性は、（５）のような感情述語（嬉しい）による受益性や（１３）の視線（見る）といった、方向性の喚起がなければ、必ずしも視点の移動にはつながらないことが分かる。

6　今後の課題

本稿は、談話におけるゼロ代名詞解釈に寄与する視点の役割を考察した。とりわけ顕現性によらず、視点のみで照応の解釈を行うために、表層表現が視点の形成にどのように関わるのかに着目した。しかし本稿は、あくまで限られたデータに基づいた事例分析にとどまっている。今後はデータを増やすことにより分析の一般性を高め、より人間の解釈プロセスに近い形で代名詞照応を明らかにし、応用につなげていくことが課題である。

＜参考文献＞

[1]Walker,M.,Iida,M.&Cote,S.(1994):Japanese discourse of sentering. *Computational Linguistics*, 20(2), 193-233.

[2]Walker,M.,Josi,A.K.&Prince,E.F.(Eds.)(1998): *Centering theory in discourse*. Clarendon Press.

[3]中川裕志,西澤信一郎(1994):日本語の理由ー行為の順接複文におけるゼロ代名詞照応,情報処理学会論文誌,Vol35,No.10,pp.2038-2045

[4]清水一澄,横尾秀俊(1995):日本語理解システムのための視点抽出と照応解決,情報処理学会論文誌,Vol36,No.2,pp.236-246

[5] 益岡隆志(1997):「表現の主観性」田窪行則編『視点と言語行動』くろしお出版

[6] メイナード・泉子・K(1997):『談話分析の可能性』くろしお出版

[7] 久野すすむ(1978):『談話の文法』大修館書店

(表1)

	1 太郎	2 花子	3 発話者
太郎は花子と結婚した。 嬉しかった。	21	0	10
太郎が花子と結婚した。 嬉しかった。	9	2	19
太郎は花子と結婚した。 嬉しそうだった。	22	9	0
太郎が花子と結婚した。 嬉しそうだった。	22	7	0
太郎は花子と結婚してくれた。 嬉しかった。	2	7	19
太郎が花子と結婚してくれた。 嬉しかった。	1	3	26
太郎は花子と結婚してあげた。 嬉しかった。	1	9	16
太郎が花子と結婚してあげた。 嬉しかった。	2	9	17
太郎は花子と結婚してくれた。 嬉しそうだった。	10	19	0
太郎が花子と結婚してくれた。 嬉しそうだった。	6	20	0
太郎は花子と結婚してあげた。 嬉しそうだった。	4	26	0
太郎が花子と結婚してあげた。 嬉しそうだった。	5	20	0
太郎は花子を見た。 楽しそうだった。	6	25	0
太郎が花子を見た。 楽しそうだった。	10	19	0
太郎は花子を見ていた。 楽しそうだった。	10	19	0
太郎が花子を見ていた。 楽しそうだった。	20	10	0
太郎は花子を見かけた。 楽しそうだった。	4	27	0
太郎が花子を見かけた。 楽しそうだった。	8	21	0
太郎は次郎と話した。 元気そうだった。	5	25	0
太郎が次郎と話した。 元気そうだった。	8	22	0
太郎は次郎と話していた。 元気そうだった。	20	11	0
太郎が次郎と話していた。 元気そうだった。	17	14	0
太郎は次郎に話しかけた。 元気そうだった。	3	26	0
太郎が次郎に話しかけた。 元気そうだった。	9	21	0
太郎は次郎に話しかけていた。 元気そうだった。	18	13	0
太郎が次郎に話しかけていた。 元気そうだった。	14	16	0